

〈復刻版〉

華文大阪毎日

全6回配本・全18巻・
別冊1（解説・総目次・索引）

【監修】岡田英樹（立命館大学名誉教授）

【解説】岡田英樹・関 智英（津田塾大学准教授）・羽田朝子（秋田大学准教授）

【総目次・索引】牛 耕耘（東京都立大学非常勤講師）

【推薦】張 泉（元北京市社会科学院文学研究所所長）

大久保明男（東京都立大学教授）・松重充浩（日本大学教授）

【原本提供】西原和海／毎日新聞社

【底本】『華文大阪毎日（華文毎日）』創刊号 - 第 141 号

（大阪毎日新聞社・東京日日新聞社編・発行、1938 年 11 月 -45 年 5 月）

全 141 号／『華文毎日 上海版』第 97-99 号（大阪毎日新聞社・東京日日

新聞社編・発行、1942 年 11-12 月）

【揃定価】498,300 円（揃本体 453,000 円＋税 10%）

【体裁】B5 判・上製・布クロス装・総約 7800 頁

【別冊】解説／総目次・索引／約 300 頁（予定）

予価 3,300 円（本体 3,000 円＋税 10%）

※分売可 ISBN978-4-8350-8401-5

お薦め先 中国近現代文学、植民地文学、中国近現代史、日中交流史、文化史等の研究者、大学・専門・公共図書館

※収録内容、定価、刊行時期など変更になる場合がございます。

■収録内容・配本予定

配本	刊行予定	定価	ISBN-No (978-4-8350)	巻 数	『華文大阪毎日（華文毎日）』収録号数（通号）／発行年月（発行日は省略）
第 1 回	2022 年 5 月	揃定価 82,500 円 (揃本体 75,000 円＋税 10%)	8381-0	第 1 巻	第 1 号（38 年 11 月）- 第 8 号（39 年 2 月）
				第 2 巻	第 9 号（39 年 3 月）- 第 16 号（39 年 6 月）
				第 3 巻	第 17 号（39 年 7 月）- 第 24 号（39 年 10 月）
第 2 回	2022 年 10 月	揃定価 82,500 円 (揃本体 75,000 円＋税 10%)	8385-8	第 4 巻	第 25 号（39 年 11 月）- 第 30 号（40 年 1 月）
				第 5 巻	第 31 号（40 年 2 月）- 第 37 号（40 年 5 月）
				第 6 巻	第 38 号（40 年 5 月）- 第 44 号（40 年 8 月）
第 3 回	2023 年 2 月	揃定価 85,800 円 (揃本体 78,000 円＋税 10%)	8391-9	第 7 巻	第 45 号（40 年 9 月）- 第 52 号（40 年 12 月）
				第 8 巻	第 53 号（41 年 1 月）- 第 60 号（41 年 4 月）
				第 9 巻	第 61 号（41 年 5 月）- 第 68 号（41 年 8 月）
第 4 回	2023 年 6 月	揃定価 82,500 円 (揃本体 75,000 円＋税 10%)	8395-7	別 冊	解説・総目次・索引
				第 10 巻	第 69 号（41 年 9 月）- 第 76 号（41 年 12 月）
				第 11 巻	第 77 号（42 年 1 月）- 第 84 号（42 年 4 月）
第 5 回	2023 年 10 月	揃定価 82,500 円 (揃本体 75,000 円＋税 10%)	8399-5	第 12 巻	第 85 号（42 年 5 月）- 第 92 号（42 年 8 月）
				第 13 巻	第 93 号（42 年 9 月）- 第 100 号（42 年 12 月）
				第 14 巻	第 101 号（43 年 1 月）- 第 108 号（43 年 4 月）※『華文毎日』に改題
第 6 回	2024 年 1 月	揃定価 82,500 円 (揃本体 75,000 円＋税 10%)	8403-9	第 15 巻	第 109 号（43 年 5 月）- 第 116 号（43 年 8 月）
				第 16 巻	第 117 号（43 年 9 月）- 第 126 号（44 年 2 月）
				第 17 巻	第 127 号（44 年 3 月）- 第 136 号（44 年 12 月）
				第 18 巻	第 137 号（45 年 1 月）- 第 141 号（45 年 5 月） / 『華文毎日 上海版』第 97-99 号（42 年 11-12 月）

※発行年月はすべて西暦表記。ただし（19）を省略した。

表示価格はすべて税別

振替 001608294084
FAX 03598116704
TEL 03598116704
〒112-0005 東京都文京区水道2-10-10 不二出版

2022.05.

在抗战时期的中国日本占领区，日本的综合杂志《华文大阪毎日》的发行量曾名列前茅。它为了了解当时的社会形态、文化状况、风土人情以及日常生活，提供了弥足珍贵的第一手资料。现已全部完成复刻！



〈復刻版〉

華文大阪毎日

- 底本：『華文大阪毎日（華文毎日）』第 1 号～第 141 号
（大阪毎日新聞社・東京日日新聞社編・発行、1938 年 11 月～ 45 年 5 月）
- 監修：岡田英樹（立命館大学名誉教授）
- 解説：岡田英樹 関智英（津田塾大学准教授） 羽田朝子（秋田大学准教授）
- 総目次・索引：牛耕耘（東京都立大学非常勤講師）
- 推薦：張 泉（元北京市社会科学院文学研究所所長）
大久保明男（東京都立大学教授） 松重充浩（日本大学教授）

全18巻
別冊1
全6回配本



不二出版

日中戦争期中国において、驚異的な販売部数を維持した総合誌、『華文大阪毎日』。当時の社会、文化、文芸を生き生きと伝える幻の資料、復刻！

《华文大阪毎日》的历史价值

张 泉

1938 年 11 月创刊的《华文大阪毎日》，简称《华每》，是日本侵华战争陷入困局时的产物。1937 年七七事变后仅 5 个月，日军就占领了北京、上海和南京。1938 年 6 月，武汉会战爆发。7 月，中共毛泽东发表《论持久战》。国军在数千里战场上顽强抵抗四个多月后撤退，日军损伤巨大，双方进入相持阶段。日本无力在短期内灭亡中国，遂抛出具有欺骗性的“日满支三国”共同建设“东亚新秩序”。对重庆国民政府诱降受挫后，日本将其中的“支”（支那），换成了在内地沦陷区炮制出来的伪“国民政府”，以僭越合法的重庆国民政府，并将其称作“新中国”。它与纳入日本的台湾（1895）、另立国家的“满洲国”（1932）一起，形成了日据区的三种不同的殖民体制。

《华每》殖民宣教的对象是内地沦陷区。作者却来自“大东亚共荣圈”各地。这样就出现了一种奇特的吊诡现象。伪满作家李正中（1921-2020）回忆，表达真情实感的作品发表不了，但《华每》敢发（2014 年 4 月 23 日）。这是因为，在内地沦陷区，可以公开表达中国文化认同。而在台湾、伪满，是严加禁止的。

1943 年，穆穆（1912-1992）曾撰文：“在国内（沦陷区）所不能刊的文章，在那上面（《华每》）都可登载”。这是所谓的“灯下黑”现象：在内地沦陷区，有中国人参与的新闻检查，更为谨小慎微。



这就道出了《华每》为什么会出现大量表达抵抗，以及后来被纳入中国文学史的优秀文学作品的原因所在。

穆穆同时还说：华北大量读者“多半只读下半本文艺栏”，即文坛、艺坛、小说、杂俎等。而上半部分是评论、对华舆论集、记述、日本介绍等宣传栏目。这表明，对于《华每》的对华思想战内容，多数读者不感兴趣。

《华每》涉及范围广，持续时间长，有取之不尽的历史资源、人情世态。出版社组织专业人员，完成了这么大的复刻工程，真是福泽学界。也是在为历史存证。

因此，我十分愿意向读书界推荐完整的《华每》复刻版。（原北京市社会科学院文学研究所所長）

特色

◎抗日战争时期，在汉语圈订户众多的一家综合杂志

《华文大阪毎日》（第 101 号起更名为《华文毎日》）是由每日新闻社刊行、面向汉语圈的珍贵杂志，它的首次复刻工作业已完成！它曾被视为日本帝国的政治宣传杂志，号称发行 7 万册。除了文艺作品之外，还刊有大量的时事报道，为了解当时的社会状况、文化、民俗等，提供了丰富的信息。《华文大阪毎日》从创刊号（1938 年 11 月）到终刊号（1945 年 5 月）总计 141 册，计划将其编为 18 卷，分 6 次出版。当年曾另行编发的《华文大阪毎日》上海版共有第 97、98、99 号三期。这三期将收录在第 18 卷里。

◎囊括时事政治、文艺特辑、随笔等，内容丰富

该杂志在以华北和“蒙疆”为首的中国内地日本占领区以及伪满地区发行，中日两国撰稿人高达 600 名左右。内容包括中国・日本・伪满洲国的政治・社会・经济现状分析、评论、座谈会、文艺・文化栏及各种写真专题。还刊有政治・行政・经济・文化各界名人的传记和肖像，以及《中日名人家庭访问记》《满洲特殊会社》等特辑。此外，文艺栏登载有华中、华北、伪满作家张资平、周作人、雷妍、但娣、梅娘等人以及日本作家吉屋信子、吉川英治等人的作品，内容丰富多样。体裁包括通俗小说和漫画、文学评论、投稿、有奖征文等，以及翻译特辑、海外文学特辑等。战后，其中的许多中国人投稿者曾被视为“汉奸”。时至今日，重新回看这些文章，更显得弥足珍贵。

◎附录卷包括背景介绍、内容解说以及便于查询的总目录和索引

附录卷《解说・总目录・索引》中收录了冈田英树的《〈华文大阪毎日〉的挑战》、关智英的《〈华文大阪毎日〉及其所处的时代》、羽田朝子的《〈华文大阪毎日〉文艺栏的变迁》。这三篇文章详细介绍了《华文大阪毎日》的发行背景及主要内容。另外，牛耕耘辑录的《华文大阪毎日》总目录附有日语翻译，索引按日语音读和汉语拼音排序，为读者检索该杂志提供了方便。

『華文大阪毎日』の歴史的価値

張 泉



一九三八年一月に創刊された『華文大阪毎日』（『華每』と略称）は、日本の中国侵略戦争が苦境に陥った時期の産物である。

一九三七年の盧溝橋事件からわずか五カ月で、日本軍が北京、上海、南京を占領した。一九三八年六月、武漢作戦がはじまり、七月、中国共産党の毛沢東が「持久戦論」を発表。中国軍が数千キロの戦場で四カ月にわたり頑強に抵抗し、日本軍は大きな損傷を受け、双方は膠着状態に陥った。短期間に中国を滅ぼす力をもたない日本は、「日滿支三国」の提携による「東亜新秩序」を共同で建設する、といういかさまの提案をもち出す。ところが、重慶の国民政府との平和交渉にも頓挫した日本は、合法的な重慶政府に替えて、占領地に偽「国民政府」をでっち上げて、それを「新中国」と称した。「新中国」は、日本に併合された台湾（一八九五年）と傀儡国家の「满洲国」（一九三二年）とともに、日本占領区における三つの異なる植民地体制をかたちづかった。

『華每』の植民地の宣伝・教化対象は内地淪陷区だったが、執筆者は「大東亜共栄圏」各地から原稿を寄せた。これにより奇妙な現象が生じる。

「满洲国」の作家・李正中は、「偽らざる感情を描く作品を（『满洲国』で）発表することはできなかったが、『華每』は掲載してくれた」と振り返っている。これは、内地淪陷区においては、中国文化に対するアイデンティティを公に表現することができたが、台湾と「满洲国」では厳しく禁止されていたからだ。

一九四三年、北京の作家・穆穆は、「国内（淪陷区）で掲載できない文章を、『華每』ではすべて発表できた」と書いている。これはいわゆる「灯台下暗し」現象である。内地淪陷区において中国人によって発行されていた新聞・雑誌は、さらに検閲が厳しくなっていた。このことは、なぜ『華每』誌に、抵抗を描いた多数の、後に中国文学史に組み入れられるような優れた文学作品が掲載されたか、その事情を示している。

穆穆は同時に、華北のほとんどの読者は、「後半の文芸欄しか読まなかった」ともいつている。すなわち、文学、芸術、随筆などである。対する前半部は、評論、対華輿論、時事解説、日本紹介などのプロパガンダ欄からなっていた。多くの読者が『華每』の対華思想宣伝に興味をもたなかったことは明らかである。

『華每』は扱うテーマが広く、発行期間が長く、無尽蔵な歴史資料や人情世態を含んでいる。今回、不二出版は専門研究者たちを集め、この復刻版を完成させた。本書は学界に益するとともに、歴史的証拠を残すことにもなる。

私が『華每』復刻版を読書界に推薦する次第である。

（ちようせん・元北京市社会科学院文学研究所所長、牛耕耘訳）

本復刻の特色

◎日中戦争期、中国語圏の各地で広く読まれた総合誌

大日本帝国のプロパガンダ誌として永らく忘却されてきた『華文大阪毎日』（第 101 号より『華文毎日』と改題）。7 万部を超える部数を中国各地に行きわたらせ、文芸作品はもとより当時の社会情勢、文化、民俗など多岐にわたる情報を満載した、大阪毎日新聞社による中国語圏向けの幻の総合誌をついに復刻！ 創刊号（1938 年 11 月）より第 141 号（1945 年 5 月）までの 141 冊を全 18 巻とし、全 6 回の配本を予定。さらに入手し得た『上海版』（第 97-99 号）も最終巻に収録。

◎時事問題、文芸特集、グラビアなど多岐にわたる内容

中国大陸における華北・「蒙疆」をはじめとする日本占領地、「满洲国」に広く頒布された本誌は、日本人、中国人併せて 600 名近い執筆者による中国・日本・満洲の政治・社会・経済の現状分析、評論、座谈会、文芸・文化欄、それにグラビア頁から構成。政治・行政・経済・文化各界著名人の経歴や肖像、「中日名人家庭訪問記」「満洲特殊会社」などの特集を数多く掲載。また文芸欄には張資平、周作人、雷妍、但娣、梅娘ら華北、華中、「満洲国」の作家、また吉屋信子、吉川英治ら日本人作家による作品、通俗小説や漫画、文学評論、投稿、懸賞論文、翻訳特集や海外文学特集を含む多彩な誌面構成となっている。中国人執筆者の多くは戦後、「漢奸」となり消息不明である。そうした彼らの情報が確認できることも貴重である。

◎時代背景・内容を詳述する解説、活用しやすい総目次・索引を別冊に

別冊『解説・総目次・索引』収録の、岡田英樹「『華文大阪毎日』の挑戦」、関智英「『華文大阪毎日』とその時代」、羽田朝子「『華文大阪毎日』文芸欄の変遷」は、『華文大阪毎日』発行に至る背景、その内容を詳述。また牛耕耘による日本語訳を附した総目次・索引は『華文大阪毎日』を活用するための重要なツールとなるだろう。



復刻にあたって

本誌は大阪毎日新聞社・東京日日新聞社が中国語圏に向けて発行した、中国語による総合雑誌である。日本人スタッフと在日留学中の俊英らとの共同作業によって一九三八年十一月に創刊され、現在、一九四五年五月の第一四一号まで、その存在が確認されている。

日中戦争が長期化、アジア太平洋戦争へと突入する時代状況において、本誌はその主な読者として中国大陆の一般市民を想定した、中国語による大日本帝国の国策プロパガンダの一環といえる。だがその誌面は、大東亜共栄圏思想の一方的な押しつけにとどまらず、大陸という「市場」の要請に応えるべく、読者の声をくみ上げる努力を惜しまず、さらには新たな世論をつくり出そうとしていた。もちろん肯定的な評価のみではなかったが、それでも当時の中国の人々の心をとらえた本誌には、ほかでみることはできない一九三〇年代後半から戦争末期に至る日中の作家、政治家、文化人、著名人の作品や情報、さらに中国各地の風俗、生活、観光に関する記事・グラビアの宝庫となっている。

当時の『中央公論』『改造』をも凌ぐ、七万部を超える発行部数にまで達した本誌だが、現在、通覧できる機関は皆無である。このたび、本復刻の企画者のひとりでもある西原和海氏の原本提供によって、そのほぼ全号にあたる全一四一号を、これまで入手不可能であった『上海版』第九七―九九号と併せて出版する。植民地期中国語文化圏に関心をもつ近現代史、文学、思想、文化史などの研究者に、この中国近現代史の空白を埋める基礎資料を供することとなった。

――不二出版編集部

推薦します

戦中期の日中文化交流を伝える貴重資料

大久保 明男

旧満洲地域を含め、二〇世紀前半の中国で日系の中国語雑誌は数多く刊行されたが、発行元が日本国内にありながら、東北から華北、華中、華南に至るまでの広い範囲で読まれ、日中戦争勃発から敗戦直前まで、七年間もの発行期間を有し、数十万の読者（自称）を擁したものは、本誌以外にはみあたらない。これほど重要な雑誌でありながら、国内外の図書館や研究施設はどこも全号収蔵していないようだ。このたび、各界関係者のご尽力により全号の復刻出版が実現したことはまことに快挙であり、意義が大きい。

日本軍占領地の中国住民向けに宣伝・教化を趣旨とする本誌は、当然ながら日本や親日政権側の政財界、軍人、官僚をはじめ、各界実力者の言説やその動向に関する記事を数多く掲載した。しかし、彼らのほとんどが戦後に戦犯や「漢奸」、あるいはその協力者として糾弾されたため、彼らが残した言説も日中両国で封印されてきた。本誌の復刻は、まず当時の彼らの言動を知るうえで欠かせない第一級の資料となるだろう。日中戦争期の政治や外交、両国の抗争や往来に関わる事実の解明が期待される。

また、「東亜文化建設」を標榜する本誌は、満洲国を含む各地域の文学作品をはじめ、演劇、映画、漫画、文芸時評、さらに各地の伝統や風習に関する記事が華やかに誌面を飾っている。中国から一時切り離された「満洲国」の文芸界が、「大東亜」の出現により皮肉にも中国本土と再接続し、文化交流が盛んにおこなわれたことが本誌によって確認できる。他方、菊池寛、横光利一、大宅壮一、久米正雄、林芙美子、吉屋信子、村松梢風ら日本人作家、徳富蘇峰、平川清風、吉岡文六ら「大毎・東日」系言論人、大谷光瑞、内山完造、小田嶽夫、実藤恵秀ら中国と深く関わった面々、さらに梅蘭芳、周作人、陶晶孫、張深切ら現地の作家や文化人などの作品や言説も数多く本誌に掲載されている。しかし、そのほとんどが既存の作家全集や文集にも収録されていないとみられる。その意味で、本誌の復刻は日中両国の文学研究に留まらず、いまなお不明点が多い日中間の文学・文化交渉史の研究にも大いに寄与するものと思われる。

（おおくぼ あきお・東京都立大学教授）

◎主な特集号・執筆者

主な特集号

「建設東亜新秩序運動」（第9号）／「中民国国民政府還都祈念慶祝特大号」（第36号）／「恭迎満洲帝国皇帝陛下特輯」（第41号）／「『海外文学』選集」（第42～52号）／「日本現代詩選訳特輯」第49～52号／「歡迎汪主席訪日特輯」（第65号）／翻訳文芸之巻」（第67号）／「女子作品之巻」（第68号）／「『大東亜戦争』特輯」（第77号）／「満洲文芸特輯」（第101号）／「華北文芸特輯」（第102,103号） ほか

主な執筆者

日本（文学者、文化人、政治家、軍人等）

田村（佐藤）俊子／大内隆雄／北村謙次郎／阿部知二／村岡花子／吉岡弥生／村上知行／火野葦平／草野心平／吉屋信子／林芙美子／伊藤整／横光利一／菊池寛／窪川稲子／バイコフ（拝克夫）／井上哲次郎／荒木貞夫／近衛文麿／芦田均 ほか

中国（文学者）

梅娘／柳龍光／張蕾／山丁／呉瑛／季瘋／王度／疑遲／呉郎／爵青／田瑯／但娣／趙孟原／閻国新／雷妍／藍苓／陶晶孫／傅彦長／陶亢徳／曹涵美／陳大悲／劉敏君／周作人／張資平／呂奇／袁犀／蕭艾／江文也／璇玲／徐白林／呉漫沙／張我軍 ほか

中国（政治家・行政関係者等）

【満洲・蒙疆】阮振鐸（駐日大使）／韓雲階（經濟部大臣）／丁士源（元駐日大使）／穆春雷（外交部秘書）／呂米寰（産業部大臣）／金永昌（蒙疆聯合委員会産業部部長） 【華北】王蔭泰（臨時政府実業部総長）／繆斌（新民会中央指導部長）／殷汝耕（山西炭礦董事長）／殷同（臨時政府建設総署長官）／管翼賢（華北政務委員会情報局局长）／宋介（新民会教化部長）／柯政和（新民会北京事務局次長） 【華中・華南】温宗堯（司法院院長）／江亢虎（考試院代理院長）／王子惠（維新政府実業部部長）／張仁蠡（漢口特別市市長）／趙如珩（教育部社会教育司司長）／湯良礼（外交部国際宣伝局局长）／許錫慶（中央電訊社総編輯）／孫湜（駐日辦事处处長）／汪向栄（駐神戸領事）／嚴軍光（興建運動） ほか



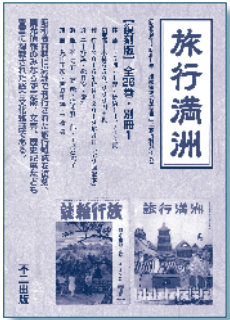
劉邦興（著）「广播教育之理論与實施」第95号（1942年10月）



「画刊 中日提携電影『日記一頁』紙上公映」第53号（1941年1月）

張資平（著・曹涵美（画）「長編小説 新紅A字（二）」第70号（1941年9月）





【解説】 高媛・田島奈都子・岩間一弘
【推薦】 荒山正彦・西原和海・三橋勇
【底本】『旅行満洲』第1巻第1号-第11巻第8号
(ジャパン・ツーリスト・ビューロー大連支部、34年6月-44年8月)
※第5巻第4号より『観光東亜』、第10巻第7号より『旅行雑誌』と改題。
【体裁】 B5判／上製／総約13,500頁
【揃定価】 **715,000円** (揃本体650,000円＋税10%)
【別冊】 (解説・総目次・索引) ISBN978-4-8350-7995-0
定価 3,300円 (本体価3,000円＋税10%)
【各配本定価】 **82,500円** (本体75,000円＋税10%)
※第1回配本のみ**定価 55,000円** (本体50,000円＋税10%)

第1回配本	第1-2巻 (34年6月-36年9月)	ISBN978-4-8350-7959-2
第2回配本	第3-5巻 (36年10月-37年9月)	同 7962-2
第3回配本	第6-8巻 (37年10月-38年9月)	同 7966-0 ※附・別冊
第4回配本	第9-11巻(38年10月-39年9月)	同 7971-4
第5回配本	第12-14巻(39年10月-40年6月)	同 7975-2
第6回配本	第15-17巻(40年7月-41年5月)	同 7979-0
第7回配本	第18-20巻(41年6月-42年5月)	同 7983-7
第8回配本	第21-23巻(42年6月-43年5月)	同 7987-5
第9回配本	第24-26巻(43年6月-44年8月)	同 7991-2



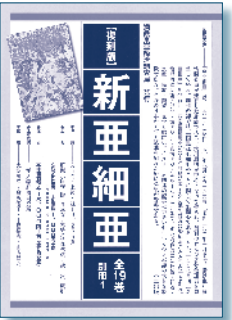
【編・解説】 白取道博
【推薦】 岡部牧夫・上笙一郎・佐藤秀夫・逸見勝亮
【体裁】 B5判／上製／総約2,980頁
【揃定価】 **154,000円** (揃本体140,000円＋税10%)

第1回配本	第1-3巻
	定価 66,000円 (揃本体60,000円＋税10%) ISBN978-4-8350-4471-2 第1巻 重要政策文書／第2巻 訓練制度関連文書 (1) ／第3巻 訓練制度関連文書 (2)
第2回配本	第4-7巻
	定価 88,000円 (揃本体80,000円＋税10%) ISBN978-4-8350-4475-0 第4巻 募集用宣伝文書／第5巻 諸調査文書 (1) ／第6巻 諸調査文書 (2) ／第7巻 諸調査文書 (3)

※発行年月はすべて西暦表記。ただし (19) は省略。

復刻版 旅行満洲

全26巻・別冊1(全9回配本)
『満洲グラフ』とならぶ満洲国プロパガンダの2大メディアにして、満洲ツーリズム最後の10年間を捕捉するための基本資料。
日本人向けの旅行雑誌であるのみならず、生活・文化などさまざまな満洲国の実態を伝える本誌は豊富なグラビアと論考、さらに旅客運賃表、時刻表など、多面的な情報の宝庫である。



【解説】 臼井陽
【推薦】 大塚健洋・倉沢愛子・中島岳志・山内昌之
【底本】『新亜細亜』第1巻第1号-第7巻第1号
(満鉄東亜経済調査局、39年8月-45年1月)
【体裁】 A5判／上製／総約10,256頁
【揃定価】 **459,800円** (揃本体418,000円＋税10%)
【各配本定価】 **96,800円** (本体88,000円＋税10%)
※第1回配本のみ**定価 72,600円** (本体66,000円＋税10%)

第1回配本	第1-3巻 (39年8月-40年4月)	ISBN978-4-8350-7044-5 ※附・別冊
第2回配本	第4-7巻 (40年5月-41年4月)	同 7049-0
第3回配本	第8-11巻 (41年5月-42年4月)	同 7054-4
第4回配本	第12-15巻(42年5月-43年4月)	同 7059-9
第5回配本	第16-19巻(43年5月-45年1月)	同 7064-3

【別冊】 (解説・総目次・索引) **定価 1,100円** (本体価1,000円＋税10%)
ISBN978-4-8350-7069-8

復刻版 新亜細亜

全19巻・別冊1(全5回配本)
近代日本のアジア観はいかにして形成されたか？ 満鉄東亜経済調査局附属研究所、通称「大川塾」を率いた大川周明、若き日の井筒俊彦、坂本徳松、前嶋信次らが、「大東亜戦争」期にみた「アジア」とはなにか。そして、イスラームとは？ 南西アジア、東南アジアからオセアニアにおける、政治、文化、宗教、民俗を扱い、1939年から6年間にわたり刊行された月刊誌『新亜細亜』は、戦後アジア研究の萌芽を知るための基礎資料である。

日中戦争期(一九三七・四五年)における満洲国を含む中国現地社会は、いかなる実態をもっていたのであろうか。とりわけ、日中戦争勃発後に日本軍の侵攻・占領下で樹立された各地地方政権や、それらをいわば統合するかたちで成立した所謂「汪兆銘政権」(中華民国国民政府)における現地社会の実態は、いかなるものだったのだろうか。そして、この「実態」に関しては、近年における所謂「傀儡政権」の諸施策や統治理念をめぐる研究が着実な進展をみせるなかにあっても、依然として大きな実証的空白部分が残存しているといわざるを得ない。

現地社会で展開された諸施策を執行現場で担ったのはどのような人物だったのか。執行対象の現地住民は、いかなる社会構造のなかでいかなる社会生活を送っていたか。現地住民たちは現地政権執行の諸施策をどのようなものと捉え、どのような対応を実践したのか。その結果、社会実態の何がどこまで変容したのか、あるいはしなかったのか。こうした現地社会「実態」把握において必須となる実証課題が、依然として十分明らかにされていないのである。そして、これらの「実態」把握を抜きにして、東アジアで日中戦争やアジア太平洋戦争が担った歴史的意義を位置づけることはできないことをふまえれば、現地社会の「実態」解明は、当該期における東アジア史研究の重要な研究課題ともなっているといえよう。

大阪毎日新聞社が中国語の半月刊として創刊した『華文大阪毎日』は、以上の研究課題を検討するうえで、極めて貴重な史料となっている。同誌には、大枠として日本の国策に沿いつつも、多種多様な対象への多種多様な取材形式による記事が掲載されており、その豊富な内容は、日中文化交流を第一義とする編集者たちの主観的使命感とも相まって、時として日本の国策を相対化しつつ、現地社会の「実態」を照らし出す貴重な情報源ともなっているからである。それは同時に、同誌が単なる日本の国策プロパガンダ誌という枠組みを超えて、戦時下という激しい切り結びのなかでなお、日中間で相互連関を通じての相互変容はあり得たのかを検討する、好個な事例を提供する資料でもあることを意味している。

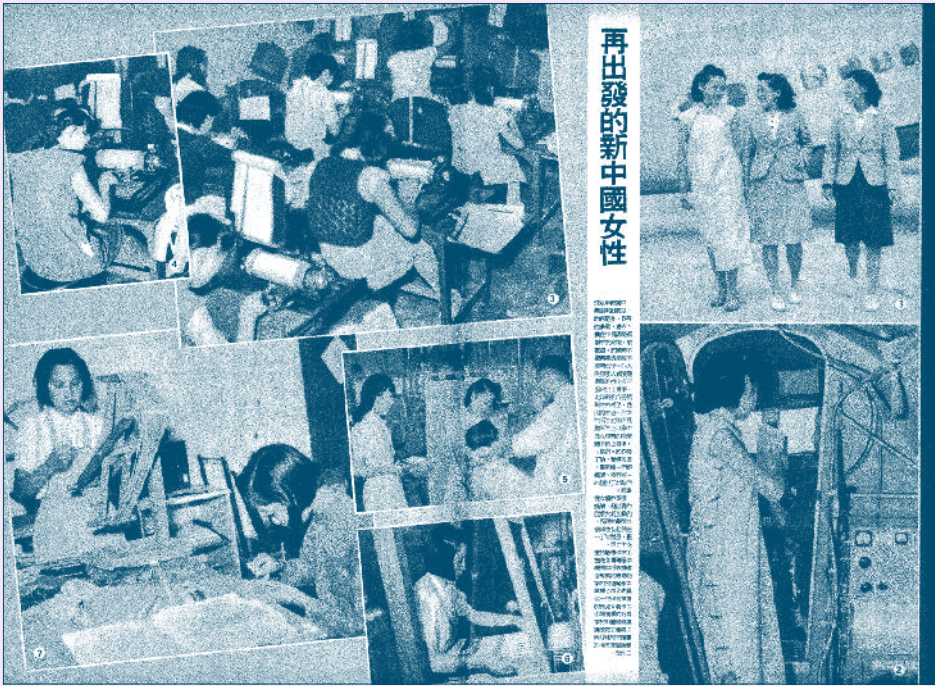
そのような貴重な『華文大阪毎日』が、このたび不二出版から復刻されることは、上述した研究上の空白を埋めつつ、より豊かで説得力のある一九三〇・四〇年代の東アジア史像再構成に貢献するところ大である。一人でも多くの方に、同誌の活用を願う次第である。

(まつしげみつひろ・日本大学文学部教授)

推薦します

現地社会の「実態」を照らす貴重な情報源

松重 充浩



「画刊 再出發的新中国女性」第71号(1941年10月)



「随員特写」第65号(1941年7月)